

## 「前に生まれん者は後を導き

### 後に生まれん者(ひと)は、前を訪え」

第11組 願長寺 川並 秀樹

令和4年5月3日、私が住職としてお預かりしております願長寺が創立500年を迎え、ご門徒、有縁の方々とともに報徳法要を厳修いたしました。

この法要で、ご本尊の前で申し述べる表白に

「<sup>ま</sup>前に生まれん<sup>もの</sup>者は<sup>のち</sup>後を導き、後に生まれん<sup>ひと</sup>者は、<sup>とぶら</sup>前を訪え」

ということばを用いました。このことばは、親鸞聖人がお著しになられた『教行信証』の締め括りに記されたことばですが、仏の真の教えを正しく伝え、顕かにしてくださったと親鸞聖人が讃えられた七高僧の一人である中国の道綽禪師が著された『安樂集』から引用されています。このことばは、親鸞聖人の直接の師となる法然上人を含む七高僧によって仏の真の教えに導かれたという自らの歩みから引用されただけでなく、「後に生まれん」まさに「今」を生きるわたしたちに、大切な願いをかけられていることばです。

うちのお寺が産声を上げた500年前、さらに親鸞聖人が全国を巡り仏の真の教えを必死に説かれた800年前、その時、その教えに触れ、真宗を生きる拠り処とされた方は、何を願われ、お念仏申したのか、親鸞聖人や当時の方々の手を合わせお念仏申すお姿に思いを巡らすと、わたしが手を合わせお念仏申す今のありのままの姿を照らし出し、心の内を問うて下さいます。

そして、このことばは、

「連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽さん

がためのゆえなり」

とあり、仏の真の教えが絶えることなく護られ、すべての人が等しく救われることを願われています。親鸞聖人自らが「前に生まれん」先達に導かれ真の教えに出遇われたように、「後に生まれん者」もその教えに出遇い、大切にして欲しいとの願いから、『教行信証』の締め括りに用いられたのでしょう。

来年は「親鸞聖人御誕生 850 年、立教開宗 800 年慶讃法要」が勤まります。改めて私たちに浄土真宗の教えを説かれた親鸞聖人へのご恩と、その教えを拠り処とし、唯々お念仏申し、法灯を護られた先達に感謝し、そのご恩に報いる歩みを誓うご縁となるよう願います。